

人種偏見のメカニズム

The Mechanism of Race Prejudice

菊 地 敦 子 福 井 七 子
Atsuko Kikuchi Nanako Fukui

The issue of racial prejudice is almost always discussed emotionally. For example, what is referred in the Japanese media as “hate speech” includes the emotional word “hate”. And the frequently used approach to combat such “hate speeches” is to appeal to the morals of those who use “hate speeches”. But as academics, we need to look at racial prejudice objectively, using scientific means to analyse the issue. The four papers by Ruth Benedict that we present here do exactly that - in these papers, Benedict tries to analyse the issue of racial prejudice and war scientifically. By doing so, she reveals that racial prejudice, racial superiority and war are deeply rooted in the social system. In times of war, blacks, whites and Jews unite against the common enemy, but in times of peace, people turn against each other. Through careful analysis of the social structure which creates prejudice, Benedict succeeds in forcefully arguing that racial prejudice has no scientific basis for justification.

Benedict takes the same scientific approach to analyse the history of war. She talks about two kinds of war - one where the purpose is simply to decide which group is stronger than the other without destroying the civilisation of the defeated group; and the other where the purpose is to destroy the enemy and take over the defeated group. She illustrates the case of some American Indian tribes where the former type of war exists and compares this to World War I which is the latter type. The reason why the American Indian tribes had no interest in destroying the conquered enemy was because they were dependent on the produce of the defeated tribes. They knew that by destroying their enemy’s civilisation, they would only be putting their own livelihoods at risk.

When we think of the world we live in today, we realise that nations are also interdependent. We can no longer exist in isolation without importing goods from other countries, without counting on other countries to purchase our products, or without the cooperation of other countries to protect our environment. What Benedict forcefully argued more than 70 years ago applies to our world today - we would only be destroying ourselves by destroying other nations.

In translating these papers by Benedict, we were deeply moved by how Benedict meticulously researched the history of racial prejudice and the history of war to find a way in which she could persuade the public to stop these self-destructive practices. We hope that by translating her papers, we would be able to convey her message to the Japanese audience.

キーワード

ルース・ベネディクト、人種、差別、偏見

本稿はマーガレット・ミードが友人であり、また師でもあったルース・ベネディクトの死後10年を経た1958年に、ベネディクトが遺した日記、書簡、論文といったものをミードの視点によって *An Anthropologist at Work* として纏めた一部「連帯感」(Bond of Fellowship)、「アメリカにおける人種偏見」(Race Prejudice in the United States)、「戦後の人種差別」(Postwar Race Prejudice)、そして「戦争の自然史」(The Natural History of War)の4篇 (*An Anthropologist at Work*: 1965: 356-382) を翻訳したものである。

「連帯感」は日付のない原稿であるが、1942年頃書かれたものであろう。「戦後の人種差別」は未発表の原稿で、1947年頃書かれたものである。最後の「戦争の自然史」は未出版の原稿であるが、1939年にフランツ・ボアズとの間で交わされた書簡からも明白であるように、1939年頃書かれた論文である。これら4篇の論文は戦前、戦中、戦後とアメリカを取り巻く状況が大きく変化した時期に書かれたものである。このことから、戦争が及ぼしたベネディクトの考えの方向や心情の変化を読み解くことは興味深いことである。ベネディクトがこれらの論文を執筆してすでに半世紀以上経過した現在、人種差別に反対する意識は世界中で高まりを見せてはいる。しかし、アメリカ合衆国のみならず、世界的にみても人種に対する偏見・差別はベネディクトが執筆してした当時とさしたる変化は見られず、それどころか差別・偏見は複雑化し、民族問題ともからみ、それらを解決する糸口はいまだ見出せずにいる。偏見・差別は過去の問題ではなく、いまも我々に突きつけられている大きな問題なのである。ベネディクトが正面から向かい合って取り上げたこれらの問題に対する科学的考察を今一度振り返って読み直すことは、連綿と続いている偏見・差別のもつ根深さを考えるにも意味あることと考える。

ヨーロッパ人にとって戦争は1939年9月1日、ドイツによるポーランド攻撃で始まった。アメリカ人にとって事実上戦争が始まるのは、その後2年ほど経過してからのことであった。何に対して戦う価値があるのか、そしてまた死ぬ価値があるのか、また何を変えるために戦うのか考えざるを得なくなっていった。ユダヤ人、黒人、またアジア人に影響を及ぼすかどうかも含み、ベネディクトはさまざまな人種差別に反対するための活動も増やしていった。それはまた戦争によって基礎を危うくされている学問の自由という原則を守るため、人前で話しをすることが苦手であってもベネディクトはラジオ放送を通して話したりもした。「アメリカにおける人種偏見」もそうした活動の一つであった。

1939年頃に書かれた「戦争の自然史」はこれから始まろうとしている戦争の可能性について、つまりこの論文の焦点はアメリカ合衆国がまもなく戦争に巻き込まれるだろうという予期のもとに書かれ、この戦争に対するベネディクトの考えを展開したものである。ベネディクトは戦争が文化的なものであり、人間性の衝動でも、先天的な生物学的本能でもないことを主張した。彼女は社会制度として戦争を受け入れた。しかしそれは謀殺のように、時代を通して、また文化によって大きく異なった形をとった。

中央オーストラリアのいくつかの部族は、自分達が似ていることを強調し、類似を争いの理

由にするよりむしろ結びつきとし、異なった部族の間に「相互依存の絆」をつくり、しきたりや儀式により、結びつきを強化することによって戦争をなくした。

メラネシアのある部族は、経済的に結びついていたが、クラ（ニューギニア島南島周辺の諸島群でみられる儀礼的贈物交換の体系）の参加者のなかでは、お金や品物や商人たちが、戦争を防止するため手の込んだパターンを講じた。第一次大戦後、平和に成功しなかったのは国々が国際的な目標に対して忠誠を表明したが、国家主義的な策略を放棄せず、国際的な新しい枠組みを作ることをしなかった。ベネディクトにとって平和を生み出すことは、世界全体をイングループにする方法を見つけることにはあったのではないだろうか。

今日、ベネディクトが考えていた国際的枠組みは戦争後形成されたように思われる。しかし世界は依然としてホーリスティックではなく、ナショナリスティックな志向がますます強くなっている。

本文の翻訳には現在差別的と考えられている語が用いられている。しかしここでは本文の通りに訳することにしたことをお断りするものである。

References

M・カフリー『さまよえる人 ルース・ベネディクト』福井七子訳、関西大学出版部、1993年
Mead, Margaret. *Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflins, 1965.

連帯感*¹

アメリカの田舎で子ども時代を過ごしていた時、ユダヤ人の知り合いはいなかった。通っていた公立の学校にはユダヤ人はおらず、後に知り合いになったユダヤ人たちに何か共通点があるのかどうかなど考えたこともなかった。そのうちの一人は裕福な服飾関係の人で、もう一人はボロボロの服を着た生徒で、ヨーロッパ哲学について私にいつも議論を吹きかけてきた。もう一人は農夫たちに商品を持ってくる行商人で、彼は物を売った後に居残ってよく祖父と見識のある話をしあっていた。彼らは私のなかでは収入によって分類された。それはどのアメリカ人に対しても同じで、私だけでなく彼らも同じような基準で人をグループ分けしていた。バッファローにいる服飾関係の商人は、他の町の商人と交流があり、行商人やパンの耳を食べて暮らしている男子とは何の共通点もなかった。ユダヤ人を集結させるような要素は存在しなかった。

反ユダヤ主義は私の子ども時代には論じられず、廃れた考え方だと思っていた。反ユダヤ主義はユダヤ人に対する残酷な仕打ちだったが、それによってユダヤ人は、すべての階級、そし

てすべての国家的分立を越えた連帯感を過去何世紀にもわたって確立してきた。それはユダヤ人にとって痛い教訓だったが、それによってドイツでのユダヤ人に対する攻撃もヨークヴィルの居住者たちに対する怒りも究極的にはすべてのユダヤ人に対する脅威であることを、他のどの民族よりも学んだのである。そしてまたどんな少数民族に対する偏見であっても、アイルランド人や黒人、イタリア人や日本人に対する差別であってもユダヤ人に対する偏見になり得る可能性があることを学んだのである。自分たちの経験から彼らは自分たちがまともに生活するには、すべての人間が怒りや差別の対象になることなく生活していける状況下にあることに限られると知ったのである。

それはすべての人間において永遠の真実なのであるが、人間は自分たちの経験を通して学ばねばならない。民主主義はこの真実を基盤にして成り立っているのだが、民主主義国家はそれを真剣に受け止めていない。もう一度初心に帰らねばならない。そしてこの戦争と戦後の平和な時期にこの真実を再確認する必要が求められる。その際にユダヤ人は意見をはっきり述べ、勇気を持って活躍することができるだろう。他の少数民族もユダヤ人と同じ教訓を得ているのだが、富裕層にも貧困層にも、またビジネス界のみならず、様々な職業層においても他のどの少数民族よりもユダヤ人は多くいる。他のどの少数民族よりもユダヤ人は国際的である。そのため各国のどのグループにもいる。そういった意味で彼らは戦略的な立場に立ると言えよう。何か侮蔑的なことが行なわれた時に、臆病心や人間のつまらない知恵によってユダヤ人がこうしたことから目をそむけるようなことになれば、本当に悲劇である。彼らが沈黙してしまわないようにしなければならない。ユダヤ人が知っている真実をまだ知らない人は多く、その真実を学ばなければならない。今の世界でこのことほど重要なことはない。全人類がまともな生活を営む権利と義務を確保しようとする、利他主義と自己愛は矛盾しないのだということを、自分たちの経験を通して学んだ人々をアメリカは真に必要としている。そのような努力は、あらゆる国と階層にいるユダヤ人をつなぐだけでなく、ユダヤ人とユダヤ教でない知識人をも結びつけ、一つの大きな力となって人々を連帯化する。

アメリカにおける人種偏見*²

何年前前に友人がフィリピンの山々を登る旅から帰ってきました。彼は文化人類学者で、フィリピンに住んでいた村の長がガイドとして彼のお供をしました。急な坂道になったところで、芋が入ったバスケットを頭にのせて歩いている背の高い原住民に出会いました。友人が住んでいる村では、男は荷物を背中に背負い、頭にのせることはない、男が違う村からやってきたことはすぐにわかりました。村長は挨拶をせずに男とすれ違い、私の友人の文化人類学者に言いました。「あの男の芋の抱え方を見たかい？昔だったらあんなふうには芋を抱えたら、村の人

に殺されていたよ。」

友人は、芋の抱え方ぐらいで殺されるということを理解することができませんでした。背の高い男が背筋を伸ばして、しなやかに荷物を抱えるその知的な顔を忘れることができませんでした。こんな品のいい男を殺すという村長が述べた理由が野蛮なものに聞こえました。そして彼は自分の国で二流市民がどのような屈辱を味わっているかを考えました。何のためにそのような屈辱を味わわねばならないのでしょうか。母語がチェコ語であったり、イタリア語だったりして、きちんとした英語が話せないために屈辱を味わわねばならないのでしょうか。クリスマスを祝わず、違う新年を祝うからでしょうか。アメリカン・インディアンのように赤と呼ばれたり、黒と呼ばれたりもします。黒と呼ばれるほとんどの人たちは、自分の父親がフロリダのビーチへ避寒に行き帰った時の肌の色ほど黒くはありませんでした。これらの理由は、フィリピンの未開の人たちが隣の村の人たちを嫌う理由と恐ろしいほど似通ってはいないでしょうか。見た目が違ったり、行動が違ったりするということだけの理由で屈辱の対象となるなら、芋のバスケットの運び方の違うだけで偏見の対象となりうるでしょう。

私の友人は文化人類学者で人種のなかの優劣に関する研究をすべて把握しています。健康な人、知的な人、想像力が豊かな人がひとつの人種に集中し、特定の国のみに生まれ、他の国では生まれにくいという考え方を支持する科学的根拠がないことを知っていました。肉体的スタミナ、知性、そしてまともな人間性を備えたトップクラスの人たちを選んだとしたなら、世界のすべての人種がこのグループに入るということを彼は確信していました。しかし、無教養な人たちの他部族に対する嫉妬は、今日のように教育が行き届き、工業化した世界においていまだに存在します。

人種差別の説明をする時、私たちは必要以上に物事を複雑化してしまいます。差別を正当化するために、その人たちの貧困、識字率、そしてふがいなさに言及します。しかしこれらは二流市民として扱われた結果に過ぎないのです。もし貧困、識字率、そしてふがいなさを理由に差別するならば、実験的にすべてのアメリカ人に自由にチャンスを与え、どんな条件もつけないようにしたらどうでしょう。アメリカにいるどの人種も、どの国から来た人も、教育から得るものがあり、いい食べ物と医療を受ければ健康になり、いろいろなタスクを遂行できるようになることは経験を通してわかっていることです。

実際、私たちが人種差別に陥ると、「外からの人間」を私たちと同じように耳や目や手を持っている人として受け入れなくなります。私たちは外国人をある商品のようにグループ分けし、色や顔やジェスチャーといった外見的なものによって選り分けます。その人の人格によって判断しなくなります。人種差別をなくすのはとても簡単です。人種、宗教、出身国などによらず、その人をそのまま受け入れるということです。そうすることによってひとつの結果が生まれます。たとえ差別をやめられない人が今も存在しようとも、やがて人種差別を助長するような人たちはいなくなり、差別は消えていくのです。

アメリカにいる私たちは、自分たちが気づいている以上に幸せなのです。ヨーロッパのいくつもの国で差別は、私たちの国の差別より深刻で、根絶しにくいものです。多くのヨーロッパの国で少数民族は国が抱えている問題から距離を置こうとしています。彼らは自分たちを孤立させたいのです。彼らは自国の言語で、自国の教員で生徒たちを教育できる学校を待望しています。彼らは自分たちの習慣、自分たちの聖者の日、そして自分たちの警察を持つために戦うのです。国によっては少数民族の数だけの労働組合があります。少数民族が国のなかに自分たちの国を作ろうとしています。つまり差別を求めているのは少数民族自身なのです。

アメリカでは少数民族の叫びはヨーロッパの国々と同じくらい情熱的ですが、彼らが求めているのは差別をなくすことなのです。アメリカの少数民族はアメリカ人になりたいのです。彼らはアメリカ市民になりたいのであって、強いアメリカを築くために彼らの反発を打ちのめす必要はないのです。強いアメリカを作るために私たちがやらねばならないことは、少数民族の前に置かれた障害物を取り除くことのみなのです。アメリカの少数民族がアメリカのなかでいくつもの国を作ろうとしているなら、それは本当の悲劇となります。そういったことはその国がどんなに健全であったとしても、弱体化させてしまいます。皮肉なことにアメリカではいわゆる多数者のみが差別を要求しています。すべての少数民族、そして多くのアメリカ人は統一したアメリカを求めており、差別や分離によって我々の国の力が脅かされることのないことを望んでいます。アメリカの少数民族は平等の機会の夢、そしてアメリカ合衆国が築かれた「すべてのアメリカ人」の夢を今日まで語り継いでいます。彼らは偉大な力を持っています。なぜなら彼らはアメリカの伝統に反対しているのではなく、アメリカの伝統を受け継いでいることを語っているからです。そのために彼らの肩には重要な責任がのしかかっているのです。彼らの運動のなかで、他のアメリカの少数民族をさげすんだり、スケープゴートにしたりしないように気をつけなければなりません。なぜなら異なるグループが入れ代わり立ち代わりランクの上になったり下になったりといったことは、アメリカでは必要ないからです。アメリカではすべてのアメリカ人の力を借りて、すべてのアメリカ人に人間としての威厳が与えられることを必要としているのです。

戦後の人種差別*³

戦争によって国内の人種関係は改善された。人種差別の暴動はなくなり、リンチも減少した。軍需産業だけでも150万人の黒人が雇用され、ワシントンのいくつかのホテルでは有色人種も食事することが可能であった。南部の新聞における白人優位の記事は例外的なものとなり、最高裁判所は白人のみの予備選挙は違法なものとした。連邦平等雇用法を阻止したり、選挙税を無効にしたりするには議会妨害者を雇わねばならなかった。日本人の扱いにおいても、初めは

理性を失って太平洋側の州から日本人を撤退させたが、その後良心を取り戻し、戦時中の四年間二世を正当に扱う努力が徐々に強まった。

人間の良識や平等の機会を与えるのが本来のアメリカだと考えていた人たちは、この本来の姿が戦争中に定着しつつあると感じた。この姿に戻るにより、黒人だけでなく、三世代目となった南ヨーロッパや東ヨーロッパの少数民族も、アメリカ人と同じように話し、ふるまうようになった。そして国の仲裁者としてのバーナード・バルーシ氏がユダヤ人であることは関係なく庶民の信頼を得ている。少数民族との良好な関係は、努力の結果得た勝利だと愛国心をもった市民の多くは感じていた。彼らは、多くの人に人種について教育し、地元や連邦の活動にも積極的に参加した。

そういった教育は確かに効果的だった。危険なのは平和な時期に入り、これまで得たものが永久的ではないと知り、幻滅し、シニカルになることだった。私の友人がある日、自分が住んでいる美しい西部の町について次のように語った。「私たちは学校や教会や婦人会で人種に関する教育をしました。学校に黒人の先生を入れることができ、限定的な契約を緩和させ、公営住宅に黒人が入れるようにもしました。しかし今ではKKKが十字架を焼いても、黒人やメキシコ人が大量に解雇されても、黒人が入れる学校を白人の親がボイコットしても誰も何も言いません。何のために私たちは教育をしてきたのでしょうか。」

彼女は平和な状況に対しての備えがなかったため、簡単に落胆してしまった。しかし、前もって備えをすることはできたはずである。アメリカ中が戦争という同じ目標に向かっている時には、人種関係はよくなる。国全体が同じ目標に向かっている時、市民は自分が属しているグループの人たちが健康でいいものを食べ、役に立つ技術をもっていれば、みんなが望んでいる結果がもたらされると考える。しかし平和時には私たちは自分のことしか考えない。自分を守ることを考え、それを道徳的に正当化するために、個人の利益はみんなの利益となるなどとわけのわからないことを言う。世の中が平常に戻ると、国全体の倫理のために個人が犠牲を払うことに対して不信感を抱く。恐怖心を感じているアメリカ人は、同胞の人たちや少数民族の人たちを競争相手とみなし、他の人たちの業績や安定をねたみ、その人たちよりも有利に立とうとする。自分たちの職を脅やかしたり、金銭的に成功を収める妨げになったりすると考える人たちは、他人ががんばって得る力を必ず恐れる。

戦争が必要とする個人の生産力や愛国心によって強められた集団の結束が弱まるにつれて、他のグループに対して簡単に嫉妬する人たち、そして他者に対して暴力的に話したり、接したりする人たちを制御することが困難になる。こういった人たちは良心と敵対心の境にいる人たちを懐柔することができ、戦時中に真に民主主義を支持していた人たちはそれに反対するほど活動的ではなかった。

戦時中と平時の対比は普遍的な社会法則ではないが、国民主義の時代を特徴づける文化的事実であり、アメリカの個人主義の伝統の特徴でもある。それは今に始まったことではない。第

一次世界大戦当時に黒人の間で語られた逸話でもこの対比は明白である。その逸話の一つはフランスで戦っていたA.E.F. (訳者注: Allied Expeditionary Forces) の二人の黒人兵の話である。一人の黒人兵がもう一人の黒人兵に言う。「アメリカに戻ったら6番街を歩いて、白人専用のバーに一軒残らず入り、飲み物を飲むんだ。」するともう一人の黒人兵が言う。「それなら俺はあなたの棺桶の後ろを歩くよ。」彼は戦争が終わり、アメリカに戻ったら、戦争前と同じ差別に直面することがわかっていた。社会的平等性を幾つもの人種や民族グループに対して強く否定していた昔のパターンがまた力強く復活する。

アメリカにおける少数民族との関係がこれですべてだとしたら望みはないと言える。しかし実際には、これですべてではない。少数民族とのもっとよい関係を望んでいる人たちは、将来の政策を考える時、アメリカがもっている財産や負債についても同様に考えねばならない。アメリカでもっている最大の財産は州の公共政策である。もちろん連邦政府や州、警察そして裁判などの公共政策が完全だと言ってるわけではない。もちろん改善する余地はある。しかし、今日のアメリカに見られる草の根の差別や分離に比べると、公共政策はそれを助長するものではなく、反対にブレーキとなっている。つまり、一般の人たちの差別と国の政策は一致していないのである。もしアメリカが善意の独裁者によって支配されているのであれば、特にこのことは注目することではない。しかし国民が政治家や裁判官を選ぶ国では、このことに首をかしげざるを得ない。肌の色や出身国、信仰によらず人を雇うことに対して強く反対している労働組合や国民の声がある州においてでも平等雇用条例を通過させることができる。強い個人が所有する大学でユダヤ人の学生のための枠が存在したとしても、税金で経営されている学校ではそういった枠はつくれぬ。私立の医科大学が最低限の黒人の医者の養成しかならないために医者の供給不足であるとニューヨーク州の黒人が今日抗議すれば、ニューヨーク州は状況改善のため何の問題もなく、州立医科大学を作ることを提案する。制限契約やジム・クロウ法 (訳者注: アメリカ合衆国南部における人種の物理的隔離に基づく黒人差別の法体系。しかし、広義には、アメリカの黒人差別体制一般をいう。) が施行されている地域であっても市や州立住宅課は、黒人も白人も両方が居住できる住宅計画を実行することができた。現在の戦後の時期において、市民の自由が低下している時にシカゴ市は新しく建設した退役軍人の住宅を白人のみにする規則に反対した。黒人に貸した家を群衆が攻撃した時、黒人たちを守るために市はかつてないほどの多くの警察官を動員した。インディアナ州のゲーリー市で白人の生徒とその親が学校に黒人を入れることに反対し、ストライキを起こした時、市長は所有法を使い、市の無差別政策を掲げてストライキを阻止した。10月30日にトルーマン大統領は「今日における人間の自由に関する憲章」を了承した。それは市民権委員会によって「緊急を要するもの」として書かれたもので、少数民族の市民としての権利を強く主張したものであった。そのなかでは少数民族の隔離と人頭税、リンチを禁止させるための法律が提案されており、永久的な平等雇用法の執行、そして「差別と人種や肌の色、信仰または国籍による差別と隔離を許している」公共

あるいは私有の機関に対する国、あるいは州の資金援助を禁止する法令を提案していた。

この州政策はアメリカのなかで最も重要なものである。しかしこの政策は、人種や民族に対する差別意識が充満しているような民主社会では、もちろん実行に移すことは十分にはできない。しかし、市民の感情が強いなかで、公共的な権力を有している人たちが、そのような立場をとったことは注目すべきことである。なぜなら、過去において人種や民族に対する迫害が起きたすべての国においては、政府がそれを許したために起きたからである。ロシアの帝政ロシア皇帝の虐殺から、ヒットラーのドイツにおけるユダヤ人の大量殺人にいたるまで一貫してその前提としてあったのは、それに対して好意的な国の政策であった。その当時の権力をもった政府は、少数民族を抹殺する政策をとっていたか、その状況が起きることに対して介入しない政策をとっていたかのいずれかであった。民族的虐殺や暴力においても、差別的行動においても、国がそれに賛同するか、反対するかは重要な役割を果たす。民主社会あるいは独裁社会においては、法律や警察を使って少数民族を守ることもできるし、虐待することもできる。国または市の法令、あるいは州の審判による労働交渉で、差別の少ない状況が新しく出来上がり、そうした法令が検討されている間に、法令に対する抗議、反対活動をしていた人も徐々に新しい状況を受け入れるようになる。アメリカでは、このような方法で仕事あるいは住宅における差別を改善することができることは明らかである。善意をもった慈善団体がいくらがんばったとしても、このやり方には及ばない。

だからといって法令化にはいたらなくても、非公式で個人レベルで行う差別をなくすような努力、また社会的関係の改善が無意味なものではない。民主社会においては、市民が法令や裁判所決定に関心を持ち、支持しなければそれらは何の意味も持たない。人種や民族間の関係をよくしようと努める人たちの究極の目標は、法令を執行するだけでは達成することは到底できない。法令は表面に現れた差別しか規制できない。明確に今までずっと白人優越や反ユダヤ主義が当たり前の集団のなかで育った人は、どんな専断的な命令を受けても黒人やユダヤ人の人間的尊厳を尊ぶことはないだろう。

世界に対して我国が人種や民族差別を減少させていることを示すには、マサチューセッツの町の教会に付随した女性たちが人種の垣根を越えた集会を催したこと、そして中西部の町で「私たちはみんなアメリカ人」という大規模な式典が行なわれたことを主張しなければならない。しかし、このような活動に参加する人たちの努力が国家、あるいは州、または市を動かさなければ、それは無意味な方策になってしまう。なぜなら各州の努力はアメリカにとって重要な強みであり、それを見落としてしまうと重要な資源をないがしろにすることになってしまう。

そういった草の根的な活動に加わる人たちは理想主義の人たちが多く、少数民族の票をほしがっている政治家と手を組むことを嫌がる。しかし、私たちを取り巻く民主主義社会においては、この二組が手を組むことによって政策が実行されるのである。もし権力を持った人たちがコミュニティ全体のために動かないとすれば、かなりの数にのぼる少数民族の有権者と手を

組むのも一つの方法かもしれない。そしてこれらの有権者は、法令が実行されるよう推し進めることができ、それによってアメリカ市民として行動することを直接経験できるのである。

人種と民族間の緊張を和らげるためにアメリカがもっている最大の財産は州の公共政策であるが、その他にももう一つ財産がある。この財産はアメリカの少数民族自身ももっている態度である。私たちは恵まれていると感謝すべきである。アメリカの少数民族の行動パターンは、ヨーロッパなどに住む少数民族の行動パターンと異なっている。なぜならアメリカには一つの大きな分離主義の少数民族がいるわけではない。それはアイルランド人からリトアニア人に至るまで同じである。チェコのズデーテン山地のドイツ人にしても、トランシルヴァニアのハンガリー人にしても、分離主義者であった。分離主義者は同化することを拒否し、寛容に扱われることには満足しない。彼らは国のなかに自分たちの国旗を掲げ、何世紀もの間、自分たちの言語を保ち、支配グループとは異なるライフスタイルを続けてきた。そして彼らは自分たちの言語で教育される学校を要求し、愛国的な活動に加わり、その目的は政権を乗っ取ることである。

アメリカ合衆国の少数民族は全く違っている。彼らは同化主義者であり、社会的多元主義者である。アメリカにいるどの民族グループも同様に要求していることは、「アメリカ人になる」権利である。彼らはアメリカのために犠牲になる同等の権利を要求する。つまり、戦場で軍に加わることを求め、血液銀行に自分たちの血を献血することを行う。英語以外の言語を使うことはアメリカ教育界において問題になったことはない。カトリックの援助を受けた学校のみが分離主義的だといえる。しかし彼らは、自分たちの言語を使うとか、自国に対する愛国心から自国のシンボルを使うことを要求するのではなく、自分たちの宗教に基づいて子どもたちを教育することを求める。そしてアメリカはその権利を自由に与える。何よりも少数民族は一流のアメリカ市民になることを欲し、彼らが抗議する時は、自分たちが二流の地位に置かれる場合に限る。

アメリカの少数民族の態度に基づいて提案できる方略は、少数民族のリーダーに社会保障や国の政治に関わる政治的活動で尊敬されるような役割を与えることである。なぜならそのような活動に少数民族の人たちを参加させなければ、地域の顔役や利己主義の政治家が彼らを利用することになる。彼らは歓迎される所ならどこへでも参画するだろう。

これら二つの財産、つまり庶民よりも国が市民の権利や民族の平等をサポートする可能性が大きいこと、そして私たちの国の少数民族が同化主義者であるという財産を無視すべきではない。他にもまだ財産はある。よりよい異文化関係を計画する国内のプログラムにそれは明確に記載されている。アメリカ人はかつてないくらい「生得」ではなく習得に対する大きな信頼もっている。私たちは個人の運命を単なる遺伝的継承として受容するような貴族的社会ではない。教育に対してすばらしい信頼感をもっており、人間は環境によって形成されると信じている。私たちはこのことをしばしば忘れがちだが、封建主義を受け継いでいる社会において見ら

れる習得に対する哲学的な疑念はもってはいない。

また私たちは人種に関する知識ももっている。人種の優劣は、文化人類学、心理学、歴史学、そして生物学の分野で科学的証拠によって打ち消されている。科学的証拠となるデータは一般的な分野から深淵なる専門分野にまでいたっている。もちろんそれが打ち消されたことによって、白人優越主義者が寛大な共和党になるわけではないが、だからといって打ち消されたことが重要ではないとは言えない。1870年から1920年の50年の間で、北方人種の優越性の教理が最盛期を迎えていた時、人々は単純にこれを信じていた。歴史学、生物学、心理学を知っている人でさえそれを信じていたのである。彼らは当然のこととして、人種的に「劣った者」としての一つの世界を考え、「優れた人種」のために別の世界を計画していた。なぜなら劣等者に世界を与えても無駄になってしまうからである。能力やよい性格、そして発案力はどの人種においても個人差があり、どの人種もこれらの能力を独占してはいけないということが科学的に証明されたことは、感謝すべき財産なのである。

つまり1940年代のアメリカ人として私たちは、人種差別をなくす努力に使える財産ももっているのである。その財産を現実的に使い、奇跡にだけ頼ることをしなければ、私たちには人種差別をなくすことに成功する可能性がある。民族の優劣の存在こそ奇跡でも起きない限り証明されることはないだろう。どんなにそれを認めたくなくても、人種差別は私たちの毎日の生活に深く染み込んでおり、客観的な基準で測ればある人種を隔離したり、差別したり、侮辱したりする国はアメリカをおいて、南アフリカしかない。他の国の人たち、特にアジアの人々からみれば、私たちは民主的平等性のよい手本とはなっていない。人種差別はアメリカ国内における大きな敵であり、戦後の何年かはこの敵の前進をどこまで許すかを試す命運のかかった時期といえよう。我慢できないような敗北に直面することもあるだろうし、道理にかなった望みも時には裏切られることもあるだろう。それでも自分たちの立場を曲げないでいるには、私たちの国全体が非常に患っており、病んだ状況から立ち直ることが何より重要だということを率直に認めねばならない。そうすることで私たちは持っているすべての財産を賢く使って、より幸福な日々を勝ち取ることができるだろう。

戦争の自然史*4

誰もがそうしているように、先日私たちは戦争の話をしていました。私たちは第一次世界大戦で何らかの役割を担っていた。話しているメンバーの中には戦争に加わった人が何人かおり、何人かの人にはウイルソンの理想主義者で、またある人は徹底した平和主義者だった。1917年から1919年の間ならば、そういう人たちは、互いを裏切り者として罵ったところだが、1939年にはみんなの声は絶望感でひとつになっていた。過去の戦争を分析して何になるのだろうか。第

一次世界大戦に関する見解は色々述べられたが、それで世の中がよくなったわけではない。すべてがよくならず悪くなった。ウイルソンの理想主義者は、ウイルソンが掲げた平和条約の14の条項を信じてウイルソンのために奉仕活動をしていたのだが、ベルサイユ条約によって、彼らがりベンジに燃えている国家主義者にだまされていたことが証明された。一度痛い目にあうとそれに懲りて何もしなくなり、どうせ私たちは自滅に向かう世界に閉じ込められているのだと言う状態に陥っていった。平和主義者は平和主義者のままで、朱に染まることは彼らの信条に反することであった。戦っている二人の一方の肩を持つことさえも、罪とされた。しかし、平和主義者も絶望を感じており、この罪は払いのけられないことを知っていた。聖職者はそのなかでも最も絶望を感じていた。彼の宗教さえも未来を明るく照らすことができなかつた。遠征隊の牧師として意欲的に奉仕していたが、幻滅に帰した。そして彼は次のように言った。「西欧社会はほぼ2000年近くキリスト教の世界にある。そしてキリスト教の教えでは戦争をしてはいけない。だれか戦争を止められたとしたら、それはキリスト教徒であるべきだった。ヨーロッパにおいて教会が何世紀もの間保持してきた勢力を考えてもみなさい。それなのに倫理も理想主義も藁ほどの重さもない。残るのは野蛮な人間の本能である。人間は野蛮ではないと考えていれば、必ず裏切られる。真実に向き合わねばならない。人間は生物学的に戦争を必要としているのだ。食べることを必要としているのと同じように。」

文化人類学者である私は、上のすべてが間違っていると信じていた。文化人類学を学んでいれば、楽観主義者には普通ならない。ユートピアを信じるには、人間は過ちをあまりにも多く繰り返してきている。一世紀、あるいは10年単位に集中することにより、はっきり見えないようなことが明確になることがある。第一次世界大戦に関する情報を細かく分析するよりもっと重要なことは、戦争の自然史をみることである。そして社会を破滅されるような戦争と、そうでない戦争を区別する必要がある。自分たちの戦争が他の文明の戦争と比してどうなるのか見なければならぬ。私たちの戦争対あなたの戦争、今回の戦争対50年前の戦争、といった区別とは異なる方法で戦争を区別する方法を見つけねばならない。戦争は地球上に古くからある植物で、その植物の自然史によってそれがどのような土壌で育ち、どこで惨事となり、どのようにして排除するのかわかることができる。戦争をコントロールすることは、そのような知識によってのみ可能であり、戦争をコントロールする努力が、そのようなものに基づくものとなるまであきらめてはならない。

なるべく端的に戦争の自然史をまとめようと思うが、戦争の自然史を語るには世界の果てまで旅し、西洋社会がとっくの昔に卒業したような状況を考察する必要がある。現代人は性急で何でも速くことを進めたがるが、全体像を見渡さねばならない。

戦争の自然史を始めるにあたって、まず戦争の種類を述べねばならない。辞書には近代の戦争の種類しか記述されていない。外交関係の破滅、国際法の破棄という定義は、すでに時代遅れである。アマゾンのジャングルの野蛮人同士の戦いも、イギリスにおける戦争も、どちらも

戦争と定義するなら、両者に共通することは、同胞によって褒め称えられ、感謝される殺人だということである。栄光につつまれた殺人である。戦争というカテゴリーの中の殺人に対して、敵に死をもたすもうひとつの攻撃的な行動が属するのは殺害である。殺害は処罰をとまなう殺人であり、その処罰は人に対する攻撃の処罰のなかでも最も重いものである。

殺人に対するそのような二重基準をもっていない原始的な部族は、戦争という概念をまだもっていない。すべての殺人を罰する原始部族はいくつかあるが、これらの部族は戦争というものが何であるか全く知らない。この非文明的な特徴をもっている南カリフォルニアのセラノ族と私は第一次世界大戦の直後に暮らしていた¹⁾。第一次世界大戦の波紋は、わずかながらではあったが彼らに届いており、彼らはあつけにとられていた。セラノ族にとって海外への遠征はカリフォルニア湾の国への危険な旅で、遠征中に命を失うこともあると考えていた。敵もそのような遠征中に殺されることもあると思っていた。しかしアメリカの兵隊は人を殺すと聞いて、これらのインディアンはそのような罪を犯せば、戦争後国に帰れないのではないかと考えていた。国に帰れば罰せられるのではないか。私の説明を聞いても彼らは理解できなかった。なぜなら彼らには二重基準はなく、マルヌの戦いで人を殺すことと、お酒を飲みすぎた酔っ払いがナイフで殺し合うのとは同じことだった。

原始部族であるこのセラノ族のように考えるには、ある特別な状況が必要である。孤島に住んでいるか、自然の境界線に囲まれているか、他の人たちが求めるような地域に住んでいないか、他の人が求めるようなものを持っていないかである。原始部族のほとんどは、それほど孤立していることはなく、そこまで貧しいこともない。殺人に対して二重基準を持つべきではないという考え方は、彼らの日常生活の経験からきている。彼ら部族は小さくても大きくても、彼らにとって大きな家族であるか、いくつかの大家族が緊密につながり合っているからである。経済においても、宗教においても、外部からの攻撃に対しても、その部落は他の人たちの助けを必要とする。すべての人がお互いの力を必要としているのは倫理的な教訓ではなく、経験において事実なのである。このグループ内で人を殺すのは殺害であり、その結末を受け入れなければならない。仇討ちを受けることになったり、殺した相手の家族に対し身を滅ぼすほどの賠償責任を取らなければならなかったり、国から死刑あるいは流刑を命じられたりする。

しかしそのような部族は、自分の部族とは何の関係もない部族に囲まれている。私が住んでいた部落は他の部族と同様に、自給自足であった。もし自分たちの部族の方が別の部族より強く、相手から好きなものを取り上げることができれば、それはご褒美として取り、享受することができる。もちろん得たものを守るだけの力をもっていなければならないのだが、二つの部族は頼り合っていないため、もう一方の部族が困ったとしても、自分たちに被害は及ばない。相手に打ち勝つことは、自分たちにとって有利なことで不利にはならない。

そうなるとう侵略者に対して、人々は喝采をおくる。この部族にとって喝采をおくられる殺人は、死刑に処される殺人と同じくらい望まれないことなのである。殺人者と国の両方が殺人に

よって利益を得る場合、その殺人は栄光ある殺人となり、国が殺人から何の利益も得られない場合、殺人者は死刑に処される。この倫理が社会的な事実を正確に反映し、戦い合っているグループがそれを受け入れている場合、戦争は健全な社会の重要な一部となる。動物を狩るように敵を狩る。これは比喩的表現などではなく、実際にそうなのである。この人間観と宇宙に対する考え方は、その部族の言語、伝統、そして体験にも現われている。人間はほんの小さな集団であって、それ以外は人間ではない動物である。動物を殺すことはもちろん称えられ、近隣の部落の二本足の非人間は動物と同じように獲物となる。彼らを殺すことによって力が証明され、ライオンが獲物をとるのに成功するのと同じである。

戦争によって有利になると考える強い部族はこのように考える。しかし被害者の方はどうだろう。戦争によって占領され、さらに占領された人たちが支配的に搾取されることが加わらなければ、被害にあった部落はそれほど生活が乱されることはない。私は何年もの間、ニューギニアの偉大な人食い人種マリンダニム族がどんな被害を受けたか想像したものだった。圧倒的な数の、支配的な部族の残虐な攻撃の前で、哀れに顔を歪ませ、恐怖に陥る人を頭に描いた。何年前かにイギリス政府の文化人類学者 F. E. ウィリアムズは *The Papuans of the Trans-Fly*²⁾ のなかで、これらの人々の詳細な研究を出版した。彼によると、ニューギニア全土を見渡してもこの部族のように几帳面に手入れが行き届いた芋畑をもっている部族はなく、この貧しい国で彼らは他のもっと安定した部族よりも自信をもって、豊かな宴会を催していたということである。彼らは穏やかで相手を傷つけず、勤勉で野心をもった人たちであった。首狩族は彼らの集落に攻め込み、血がついた戦利品を持って帰ったのだが、いずれにしても死はいつか来るもので、マリンダニム族の手による死も他の死とは変わらないものであった。

私が言いたいことは、苦しむことがあっても仕方がないといった冷淡なものではない。そうではなく、現実を直視すると、戦争がもたらす大破壊はすべての種類の戦争で起きるわけではないということである。戦争前に上記の二つの部落はまるで別々の惑星に住んでいたかのように自立していた。そして戦争後も同じような状態に戻った。なぜなら戦争は単に狩であり、征服者たちを豊かにするために、征服された人たちを奴隷状態に陥れることが目的ではない。荒々しいマリンダニム族の被害者は、現代の植民地搾取における原住民のようなみじめな存在ではない。戦争によって彼らの自立した生活は取り上げられることなく、征服者の言いなりになるような存在になることもなかった。

生活破壊的ではないこうした種類の戦争は、侵略者とその被害者の間に起きるだけではなく、戦いにおいて同等の部族同士においても起こり得る。昔の北米インディアン部族のほとんどは、国際的な血の戦いを延々と続けたが、このような果てしない戦争のなかで、勇敢な行動をとることは人間が達成できる最も偉大な栄光だった。今日のボーイスカウトと同じように、そのような勇敢な行動をとることによって、地位がひとつずつ高くなっていった。インディアンにとって勇敢な行為とは、倒れてはいるがまだ生きている敵を触ること、頭皮を取ること、相

手の馬をとって逃げることも、何も失わず自分の小さな軍隊を連れて帰ることなどであった。勝利は、ある時にはある部落の兵士たちに、またある時には別の部落の兵士たちに舞い降りた。しかし、彼らの戦争は社会を破滅するようなものではなかった。これらの部落は、経済的にもお互いに独立し、妻を娶るのもお互いに別々に行っていた。そして戦争の仕方も社会的事実に沿って行なわれた。戦争の目的は勝利を得ることにあり、相手の部落の人たちを支配し、彼らの支配者になったり、彼らによって何か利益を得ようといったことは目的ではなかった。北米の原住民の間では、征服するという考えは出現したことはなく、それによってすべてのアメリカ・インディアン部落は革新的なことをすることができた。それは戦争を国から切り離すということである。国の象徴はピース・チーフ（平和の首長）であり、彼は内輪の人々や議会に関わるみんなのリーダー格であった。平和の首長は永遠の地位であり、独裁者ではなかったが、非常に重要な人であった。しかし彼は戦争とは全く関係がなかった。彼は戦争の首長を任命することもなく、戦闘士たちの行いを気にかけることもなかった。人を集めることができる人ならだれでも、いつでも、どこでも戦闘団を率いることができた。部落によっては、その人は遠征の期間中、完全なる支配力をもっていた。しかしこの立場は戦闘団が帰宅した時点で力を失った。したがって、国がこのような遠征に興味を示すことなど考えられず、こうした遠征が政治に無害の場合、荒々しい個人が外部に対抗心を見せ付ける替えられるべき行いであった。

こうした害のない戦争は、原始的な人たちの間ではかなり一般的なことである。害がないという根拠は、戦争に関わる両方の部族の文明が破壊に導かれることはないということである。もちろん戦争は冷酷さと残酷さを生み出し、極端な欠乏に耐える力を引き出す。戦争が人間の性格に及ぼす影響で、このような性格を嫌う人間は戦争がもたらすこの影響を非難し、このような性格を好む人たちは戦争に対する逆の評価をすることとなる。しかし制度化された慣行としての戦争を明らかにするには、そのような性格云々とかいったことではなく、それを超越した文明を破壊する戦争か破壊しない戦争かを区別しなければならない。

殺人に対する二重基準があったとしても、単純で自給自足の社会のすべてが戦争を始めるわけではない。有史前の戦争に関する政治学者の理論を読むと信じられないかもしれないが、戦争をしない社会はそれほどめずらしくはない。たとえば中央オーストラリアの部族の大多数は、自分たちにとって有利なものをいっしょに追求しようとしたことで戦闘をほとんどなくした。中央オーストラリアの部族は典型的な野蛮人であるが、彼らの野蛮性には「ジャングルの掟」というものはなかった。お互いの儀式を分かち合い、相談するために集まり、良い治安を広範囲で保ち、血縁関係の結婚と同じ位、秩序立った部族間の結婚の形を確立した。彼らは殺人に対する二重基準を受け入れており、起きた殺人は外の人間によるものだと信じていた。しかし彼らは外からの魔術師に対して仕返しをする気は全くなく、かの有名はアルンタ族³⁾は殺された人の墓の上の虫を踏み潰すだけで満足した。殺人者は死ぬと彼らは言っていたが、血の決闘をするための一歩を踏み出すことはなかった。中央オーストラリアに戦争がなくなったのは、

遠くはなれた部族間の暖かい絆から成る相互依存の結果であり、この絆は私たちからみれば奇妙なたくさんの儀式と風習で強められている。そしてそれらの儀式と風習は遠くの部落にも及び、それによってこの典型的な野蛮人でさえ戦争をすることはなかった。

原始社会が自給自足することができず、経済の主要な部分でお互いに頼らなければならず、戦争が不可避となった場合、社会的害を与える戦争になるかどうかのテストケースとなる。しかし彼らはそういった状況に対して巧みに対処している。その対処の仕方は、原始社会の奇妙な習慣のなかでもとりわけ奇妙な習慣に発展したものが多い。西メラネシアのクラの輪の地域は、マリノフスキー⁴⁾とレオ・フォーチュン⁵⁾によって有名になったが、その地域の人々は、この風変わりな儀式的な交易によって島々間の闘争を中央オーストラリアと同じレベルまで撲滅させた。それぞれの島は、その地独特のものを生産する。つまり、ひとつの島はカヌーを作り、もうひとつの島は陶器を作り、別の島はグリーン・ストーンを磨き、また別の島では木を彫る。しかし彼らはこれらの製品を市場で売ることにはしない。この交易は二つのお金、つまり貝のネックレスと貝の腕輪でなされ、貝のネックレスは時計回りに輪を描いて島々を巡り、貝の腕輪は反時計回りに交易に使われる。この二種類の「お金」は同じ場に存在することはない。ひとつの島のクラ・グループは腕輪を得るために南に行き、6ヵ月後に南の島の人々が代わりにネックレスを得るために北に行く。そして両方のグループは食べ物や作られたものを挨拶としての手土産として持ち歩いている。クラ交易は、経済的な効率から考えると奇妙で、時間がかかるこだわりであるが、島々を絆で結びつけ、戦争に至らないようにしている。

西メラネシアの他の大部分の地域では、交易は戦闘を防いではないが、戦争によって経済的状况が中断されることがないようにしている。交易は攻撃から隔たっており、戦闘があつたとしても交易は続けられる。ある部族が専門的に生産するものは、地理的位置がそれをするのに好ましいということもあるが、全くそうではないこともある。丘の上の部族で塩水でしか料理しない人もいるが、海岸近くに住んでいるにもかかわらず真水でしか料理しない部族もいる。そのため塩水を毎日運ぶ人たちは、真水を運ぶ人たちと中間地点で会い、それを交換するという交易が続くようになる。どの部族も自給自足というわけではない。にもかかわらず、この地域のほとんどでは激しい首刈りが行なわれている。商業交易において最も大きな自慢は相手の頭骸骨であり、それは部族の男の家の飾りとなる。それでも、交易は続けられる。部族の人たちは、お互いのことを見もしなければ声もかけない。ひとつの部族は決められた線の上に自分たちのものを置き、そして退却する。両方の部族の人たちは、物の価値を知っており、自分が差し出したものに見合った価値のものを相手から取る。そして二つ目のグループの人たちが退却すると、最初の部族が前に進み、差し出されたものを持って帰る。これが「沈黙の交易」の制度であり、私たちにはどんなに原始的に見えたとしても、この制度によって私たち西洋文明を圧倒しているような困難な状況を避けることを可能ならしめているのである。

もっと複雑で原始的な社会においては、相手を征服することによって、戦争による社会破壊

を防ぐことがしばしばあった。征服者と征服されたものの違いは、しばしば伝統的で尊重されている身分の違いに基づいて確立され、各部族の活動は維持され、お互いにサポートし合えるものになった。そのため、東アフリカで牧畜民に征服された鉄工と農民は、牧畜民の部族経済に組み込まれるようになった。農民は自分たちの土地を離れさせられることもなく、鉄鋼業者の市場独占も破壊されることはなかった。農民と鉄鋼業者の低い地位は同情に値するが、その地位を共有する人たちの間における戦争は免れ、素晴らしい文明を築いた。

生活の中心においてお互いに強く頼っていたり、同じ土地を共有していたりするにもかかわらず、社会的に害があるタイプの戦争をした原始部族を私は知らない。そのような部族もあるかもしれないということは否定はしないが、そうしたことが書かれた物がないため、そういった狂気に対して無知であっても至極当たり前である。原始社会における害がある戦争の例は、経済的に頼り合っている部族間では見られず、婚姻によって相互依存し合っている状況で見られる。原始社会では男が結婚できる女性について厳格な決まりがある。そして男性と同じ村の出身の人とは通常結婚はできない。それぞれの部落が他の部落と戦争していたら、犠牲者は自分の妻と同じ部落の人であったり、「兄弟」であったり、血縁のある「兄弟」であったり、血縁の父親だったりすることもある。戦争を相殺して平和をもたらす風習がなければ、このような状況下では家庭は根こそぎ破壊される。女性は絶えず忠誠心の間にあり、夫の部落に住んでいたら、兄の首がとられた時、勝利のダンスを踊って祝わねばならないし、父親の部落に住んでいたら、夫の首がとられた時、勝利のダンスを踊って祝わなければならない。子どもたちは母親の兄が自分たちの父親を殺した人だと知りながら育ち、あるいは自分の父親が母の兄弟を殺した人だと知りながら育つ。血縁関係、あるいは血縁で結ばれる家族の結納のやりとりによって、経済的安定を築くことはできない。

ブラジルのケインガング族⁶⁾のような南アメリカのジャングルの部落での状況はさらに劣悪である。それぞれの部落で食べ物を集めるための小さなグループがつくられ、それぞれのグループはジャングルのなかをさまよう。それぞれのグループには必ず別のグループに親族がいる男がいて、その親族からこっちのグループを手伝うように言われる。しかし、それをすれば自分の命が危ないことを男は知っている。そのためどの男も他のグループにいる義理の父親や義理の兄弟に暴力をふるうようになる。彼らの親族間の戦いは終わりがなく、背信的であり、どんな原始部族よりも社会的に痛ましいものである。このようにして部落がお互いに破壊しあう寸前に、生き残った部落民が保護地区に集められた。そのような社会は、お互いに頼り合い相互結婚してきた社会を戦争や血みどろの戦いで破壊したことにより、その愚かな行為の社会的報いを受けねばならない。

今日文明社会は、義兄弟間の戦争に戻っている。私たちは害がある人種間戦争を遂行し、その戦争の害は人間のあり方からくるのではなく、社会のあり方からきている。戦争は、真に独立した国家間に根を張り、精力的に栄えるかもしれない。そして人は死んだとしても、戦争は

その文明社会の構成を破壊することはない。勝利者が得るものは真の獲得かもしれないし、敗北者の喪失は受け入れられるか、あるいはそこから復興するかもしれない。弱い部族は消滅させられるかもしれないが、それによって勝利者の力は弱められることはない。しかし相互依存した国家間で戦争が起きると、獲得したものは獲得ではなく、失ったものを回復するには戦っている両サイドをさらに破壊することしかできない。そうなる戦争は社会的悲劇となる。

つまり社会に対する戦争の危険性は殺人に対する二重基準だけではない。本当の脅威は社会の状況に反して戦争が始まり、社会を破壊へと導く場合である。近代金融、商業、生産、美術と科学の発展が各国間の相互依存を頂点に至らしめた時に、第一次世界大戦が社会的破壊をもたらす戦争の最たるものとなった。近代的な状況下で戦争を起こすことは征服される国にとっても、征服する国にとっても同じような社会的災難をもたらすことに気づかねばならない。現在の戦争に関する重要な事実、宿命主義者の考え方がいかにナンセンスかを示している。彼らは単なる聴衆になり、現実の戦争は、体の右側の傷を治すために左側を切り刻むようなものなのに、宿命主義者はただそれを見ているだけだった。ナイフや銃や爆弾を使って、苦しんでいるのを見て宿命主義者は「身動きがとれていない。やろうとしていることができていない。体の作りがなっていないのだ」と言っているようなものだ。何もできないのはあたりまえだ。体の左の部分の炎症が右側まで広がり、右脚が動かなくなると、残った左脚では進めない。もし医者なら、「こんなことをやめない限り、死んでしまいますよ。回復させるには、血液は体全体を循環しており、体の一部を切りつけてしまうと死に至るということに気づくことだ」と言うだろう。

技術の進歩によって世界は膨大な社会となった。「今日の文明は大量生産を基盤としており、どの文明国も大量生産したものを売りたいがっている。どの国も自分たちの製品を売るだけ売って、何も買う必要はないと思っている。そしてどの国もある政治団体を別の団体より好む。こうしたやり方がうまく機能しない場合、(売ると買うのは一つのコインの裏表なのだから、買わずに売ることだけなんてうまくいくはずがない。) その国は、自分の市場を守るため戦争を始め、経済と商業が戦争によってさらに破壊されると、もうお終いだと言う。」こういう状況を経済学者はきちんと指摘しなければならない。そして政治家は、「近代国家は、他の国の利益を犠牲にしなければ、相手国と異った見解を述べたり非情な政策を遂行したりすることはできない。消費物の生産を武器の生産に切り替えるには、全世界の国々を武器生産の国に引き込むしかない。我々の政策は、すべての文明を破滅に引き込むような致命的な混乱をつくっているのに、我々は裏切られたと泣き叫ぶ。みんなと共存していかねばならないような文明を守るには、そのようにさせる制度を採り入れなければならない」と言う。

勝手なことはできない。国際的な文明国となり、その利益を受け取るには、他の国を根こそぎ破壊することはできない。なぜならそのような社会における戦争は、自分で自分を痛めつけているようなものだからである。

これが戦争の基本であり、反省すべきことは、世界大戦における各国のプロパガンダ、そして戦後の平和条約においても知識が活かされなかったことである。世界大戦が起きる前の難局は、1914年から1919年の間に増大し、その結果はだれもが予想し得たことである。戦後、国々は一国では到底成し得ない目標を掲げ続けた。しかし、世界の現実を直視し、制度を改善しようとした国家はひとつもなかった。求められた基本的変化は国際的アナキーをやめることであった。必要だったのは、貨幣制度、植民地政策、保護主義政策、そして国防政策において国家主権をなくすことであった。しかし私たちが手に入れたものは、調停国、ライバル国を増やすような「民族自決」、輸入制限、そして平和条約を守る気がない国々によって作られた国際連盟だった。勝利した国々は国際貿易の利益をすべて得ると同時に、貿易がうまく機能できる状況を粉砕した。そうすることで何も得られなかった国々から怒りを買うことになり、武装、国家の侵害や軍備を駆り立て、やがて1939年9月2日に戦争布告がなされた。

このような大混乱をもたらすのは、人間が生物学的に戦争をせずにはいられないからだというのは大きな間違いである。この大混乱は人間が作り出したものである。いずれにしても私たちは世界戦争に巻き込まれるかもしれない。アメリカ式の生活を守るため、あるいは利益を手放したくないため、そしてこちらからの攻撃、あるいは受けた攻撃によって戦争に引きずり込まれるかもしれない。戦争に関わる理由が理想的であろうとなかろうと、それによって失うものは同じである。第一次世界大戦のように何かを失って、何も得ないこともあれば、何かを犠牲にしても犠牲にするだけの価値があるものを得るかもしれない。しかし何かを残すには、どのような平和的目的を持てばいいのだろう。すべてがそれにかかっている。それはもちろん戦争前の状況に戻るということではない。戦争前の状況は世界史のなかでも最も破壊的な戦争の状況である。近代社会で必要なことを実行するように機関に働きかけねばならない。人間の真の利益を理解し、それを追求できるような枠組みを作らねばならない。なぜなら過去の歴史をみると、社会的な枠組みを提供しなければ、人間は自分にとってよいことを追求することはできないのが明白だからである。人間がいつでもどこでもやらなければならないことは、この社会的枠組みを現実社会に合わせるということである。現実社会は変化しており、過去の歴史において自給自足の小さな部落から現在の工業社会への変化ほど劇的な変化はかつてない。アリストテレスも紀元前4世紀のアテネを考えた時に、国の位置づけはその国の独立性ではなく、その国の自給自足性にあると考えた。もし国が自給自足しておれば、国は自然に独立国家となり得た。彼の分析は論理的で鋭い。今日国の独立性と自給自足性の関係が失われているなかで、国の独立性を主張することは自滅的な時代錯誤である。

それは国際的なアナキーである。アナキーとはそれが国家内にしろ、二国間にしろ共通の統治が欠如していることで、生活を支える枠組みが欠けているということである。ホブスは正しかった。アナキーは人間にとって行政の欠陥以上に危険である。アナキー国家における人生は「貧しく、卑劣で、野蛮で、短い」。ホブスは17世紀のイギリスの市民戦争で目

にしたアナーキーについて書いている。もし彼が今日生きていれば、国際的アナーキーについて書いたに違いない。西洋文明におけるすべての戦争がカオスをもたらしたわけではない。1780年から1870年の間に戦争をしていた国々は、現在と同じように相手国に対して嫉妬を抱き、凶暴であった。それらの戦いは今日の私たちからみると限りなく小さいものに思えるが、各国の資源とその時期に必要なであった商業を考慮に入れると、その規模は今世紀の世界戦争に匹敵する。その時戦いに加わったところは、ババリアとプロシヤ、バーデンとヴーテンベルグ、ピエドモントとトスカーナ、そしてパルステートであった。これらの国々によって戦われた戦争は、合併を防ぐためのもので、戦いは激しく、すべての参加者を貧しくした。しかしこの犠牲は、国の権力者が新しい状況を防ぐためには仕方がないと考えていた。それが報われたのは、敵の大半が敗北によって力を失った時である。彼らは最後には降参し、合併が勝利したので、現在振り返ってこれらの戦争がよかったと考えられている。しかし「よかった」のは合併であり、戦争がよかったのではない。スイス、カナダと13の植民地では戦争なしに各地域の合併が獲得された。

近代世界の工業的、技術的進歩を考えると、もっと大きな地域に合併されるべきだったが、そこに至る前に合併は終わってしまった。これらの統合が1870年に突然固まり、イタリア、ドイツ、そして他のヨーロッパ諸国ができ上がった。今日世界はさらに小さくなり、まだ広い地域では主張と相互利益を終結させ、戦争の意味をこれまでにないほど真剣に考えねばならない。手遅れにする前に戦争の意義が国会や議会で公けに議論されるべきだという考えを民主国家の間に浸透させねばならない。それをイギリスを援助するための条件としなければならない。破壊的な戦争はやめることができる。しかしそれを止めるには新しい国際的配慮が求められ、そこでは競争意識や非情な政策は排除され、みんなが何かを得るようであればならない。人々を戦争に駆り立てる理想的な考え方はたいてい疑わしい。他の人と同じように私たちも理想的でなければならないが、善意で行ったことは戦争の間、いい社会的結果をもたらさず、戦争が終わっても、社会の規則を変えない限り何も達成することはできないという点を忘れてはならない。善意の行動がなければ何の変化もないため、それは必要なのだが、それが意味を持つようになるのは規則を改善した時である。革命のあとの13の植民地では善意の行動があった。しかし、我が国の成長の土台が確立したのは、13年間の不毛と無秩序化の後でライバルの植民地が西の地域を手に入れるため協力し、統一した貨幣を導入し、地元の利益を越えて問題解決をする連合政府を設立してからである。すべての植民地が同じ目標を掲げるという可能性のもとで、我々の先祖は制度を設立しなければならなかった。彼らは先見の明を持っていた。なぜなら1789年の段階では技術的、商業的、そして他の社会的勢力によって広い地域が相互依存するということは、今日ほど明らかではなかったからである。1919年にはそのことはもっと明らかになり、世界大戦後にその制度がまだ設立されていなかったため混乱が起きた。

平和に関する一般的なことを叫ぶことも、気高い行動も同じ位疑わしい。原始社会において

も恐ろしい例がある。イロクオイ族の例をよく心に留めておくべきである。彼らは強い兵士で、「平和を維持するため」に連合体を作った。彼らは自分たちの平和の願いを、感動するような比喩を使って話し、すばらしい詩の儀式でそれを祭った。その連合体は自分たちが行進できる範囲内にあるすべての部落を苦しめた。「平和を維持するため」に小さな部落を襲撃し、その経済を破綻させた。イロクオイ族の兵士が留守の間、彼らに苦しめられた他の部落の人たちは結集し、イロクオイ族を襲った。そのいきさつはベルサイユの平和の原始人版のようである。

もしそのような平和がイロクオイ族の原始的な社会で大失敗に終わったのであれば、1941年の西洋文明においてそれが成功する率は極めて低い。だからといって、あきらめる必要はない。今日の世界経済と社会条件は、国際協力のためのしっかりした基礎となり得る。私たちがやらねばならないことは、今日あるカオスを終わりにするためのメカニズムを設立することに力を注ぐことである。もしそれに失敗したとすれば、私たちが事態を十分に分析しておらず、極端な要求をしているからである。警察に権力を与えて、問題の仲裁に入ってもらうことはできない。罰を与えても問題の根本は解決されない。近代社会の現実にあった社会的メカニズムを提供してくれるような平和を、私たちは目指さなければならない。

注

*¹ 日付なしの原稿、1942年頃

*² ラジオ講演、1946年、ワシントンDCにて

*³ 未発表の原稿、1947年頃

*⁴ 未出版の原稿。1939年12月3日付けのベネディクトからボアズへの手紙、1939年12月20日ボアズからベネディクトへの手紙、1939年ベネディクトからボアズへの手紙参照

1) ルース・ベネディクトの論文、“A Brief Sketch of Serrano Culture”, *American Anthropologist*, 26号、No.3、1924年、360-392ページ

2) オックスフォード、クラレンドン出版社、1936年

3) B. Spencer and F. J. Gillenによる著書、*The Arunta*、ロンドン、マクミラン社出版、1927年

4) Bronislaw Malinowskiの*Argonauts of the Western Pacific*、ロンドン、ルートリッジ出版、1923年

5) *Sorcerers of Dobu*、ニューヨーク、ダットン出版、1932年

6) Jules Henryの*Jungle People, a Kaingang Tribe of the Highlands of Brazil*、ニューヨーク、オーガスティン出版、1941年